

# やわ 柔らかくしなやかに曲がるロフティ

あおあお しんりん おか  
青々とした森林でおおわれた丘のてっぺんに、ロフティという立派な木が立っていました。ロフティは、大きくて誇り高く、頑丈な木でした。

ある朝のこと。木々は、暖かいそよ風の中で枝をなびかせながら、白なたぼっこをしていました。ロフティは周りの木々を見て、しかめっ面をしました。(木である我々が、ちょっとした風にもすぐなびくというのは、何ともおかしいことか。風に押されてしなったり なびいたりするなんて、いやなこった。自分の枝が風の吹くままにゆさぶられるなんてね。私はむしろ、自分の枝は自分で治めていることを、みんなに見せたいものだ。)

しばらく考えた後、ロフティはあることを思いつきました。「よし、自分の枝は自分で治めることにしよう！」 ロフティは誇らしげに、他の木々に宣言しました。「私は、風に吹かれても、自分の枝が動いたり、しなったり しないようにすることにしました。風の気まぐれになんか、身を任せるものか。私は、お前達おろかな木々のように、しなったり 踊ったりはしないぞ。自慢の頑丈さがどれほど見栄えよくなるか、見せてやろう。」

その夜、風が強く吹き始めました。ロフティは、風に吹かれたり ゆさぶられたりしないように、枝々を固くし、力の限りをつくして、じっとしていました。

まもなくすると風ははげしくなり、やがて大嵐になりました。それでもロフティは、少しも枝をゆれ動かさせまいと決意していました。「我々の動きがすべて風任せである必要はないことを、証明するぞ。」 そう言って、ロフティは他の木々に自慢しました。





まわりの木々は、風と共に踊りながら、嵐を楽しんでいました。「風の中で踊るのって、すごくわくわくするよ！」 踊っているシラカバが、嵐よりも大きな声で叫びました。「私の枝葉は、まるでくるくる回転しているみたいだ！」

「私の枝を見て！ 飛んだり跳ねたりしているわ！」 ヒノキも、飛び跳ねながら言いました。

（風になびくなんて、おろかな木どもだ。）と、ロフティは思いました。その時です。突風が吹いてきて、ロフティに強くぶち当たりました。ロフティは、根がぐいっと強く引っ張られるのを感じました。突然、ロフティは、自分が根こそぎ地面から抜けて、吹き倒されるのではないかという不安におそわれました。そこで、強く構えていた姿勢を素早くゆるめ、枝を風になびかせるままにしました。

「風が強過ぎて、もうちょっとで根こそぎになるところだったんだ。」自分の枝がなぜ、今は風になびいているのか、ロフティは仲間の木々に訳を話しました。



えだ かぜ まか  
枝が風になびくのには任せると、ロフティの  
こころ よろこ  
心には喜びがあふれてきました。「ああ、なん  
たの  
楽しいんだろう！」 ロフティは声をあげました。  
かぜ おど たの  
「風といっしょに踊るのがどんなに楽しいこと  
なのか、私はすっかり忘れていたよ！」

あくる あさ あらし す さ たいよう かがや  
あくる朝、風は過ぎ去って、太陽が輝きました。  
もり き ぎ  
森の木々は、すてきな明るい日をむかえました。  
そのなかでも、ロフティはとびっきりしあわせでした。  
わたし ふたたび じんせい たの  
「私は再び人生を楽しむことができるように  
なったよ！」と、ロフティは言いました。

こうまん がん こ とき じんせい  
「ひどく高慢で頑固になっていた時は、人生が  
たいくつ  
退屈だった。だけど今からは、謙虚でしなやかな  
木になりたいと思う。私も、仲間の君達のように、  
かぜ ふ えだ  
風に吹かれて枝がたわんだり しなったりするま  
まにさせるよ。」

き ぎ みな  
木々は皆ほほえみました。ロフティが自分達と  
いっしょに ふたたび じんせい たの  
いっしょに再び人生を楽しむことができるように  
なって、うれしく思いました。また、しなやかにな  
ることの大切さも思い出すことができ、感謝  
したのでした。

作者不明 絵: ジャン・マクレイ 彩色とデザイン: ロイ・エバンス  
出版: マイ・ワンダー・スタジオ

Copyright © 2020年、ファミリーインターナショナル  
"Flexible, Bendable Lofty"--Japanese  
関連の読み物はこちら ⇒ 順応性、子供のための物語



### かんが 考えてみよう：

- 「順応性がある」とは、どんなことだと思う？（「順応性」の意味を知らなかったら、辞書で調べてみよう。）
- 順応性のある考え方をするのが良い状況とは、どんな時だと思う？